
肉奉行

るうね

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肉奉行

【Nコード】

N0060M

【作者名】

るつね

【あらすじ】

肉奉行から、荷物が送られてきた……。

「おい、肉ばかり食うなよ」

伸也しんやの抗議にも耳を貸さず、誠司せいじは土鍋から大量の肉を箸で引き上げた。

「だから、取りすぎだつて」

「いいだろ、別に。無職で求職中の俺を哀れむ人間らしい感情がないのか、お前には」

「求職中だけに、求食中つか？ 下手なシャレだな」

そんな二人のやり取りを、弥生やよいがくすくす笑いながら見つめている。

「弥生も何か言ってやってくれ。このままじゃ、こいつに肉を食らい尽くされてしまう」

「わたしは別に……白菜やお豆腐で充分よ」

「そうそう。肉ばかり食っていると栄養が偏るからな。だから、あえて俺は肉だけを食っているわけだ。お前らが病氣しないようにな」

「屁理屈にもなっていないぞ、誠司。だいたい、肉を全く食わなかったら、それはそれで栄養が偏るだろうが」

そう言う間にも、誠司は鍋から肉を引き上げ、口の中に詰め込んだ。

伸也はあきらめて、箸をテーブルの上に投げ出した。缶ビールのプルタブを開け、中身をすきつ腹に流し込む。

「しかし、肉奉行は遅いな」

伸也は壁に掛かった時計を見た。

「こんな時こそ、あいつの仕切りが必要なのに」

「あいつ、は、こと肉に関しちゃ、はふはふ、うるさい、からな。今の、うちに、食えるだけ、食って、もぐもぐ、おかないと」（プー）

「しゃべるか、食べるか、屁をこくか、どれか一つにしろ」

「じゃ、屁をこく」

プーと、誠司のお尻のラッパが鳴った。
やりたい放題だ。

弥生が笑いながら、

「八時頃に来るって言ってたでしょ。もうそろそろ、来るんじゃないかしら」

と、その時、チャイムが鳴った。

「お、噂をすればなんとやら、かな？」

「肉奉行さんのご到着、ね」

弥生が立ち上がり、玄関の方へ歩いていく。

伸也は誠司に意地の悪い笑みを浮かべてみせ、

「お前の横暴も、これまでだな」

誠司はそれには応えず、ラストスパートとばかりに、口に肉を詰め込んでいた。

「ねえ」

弥生が戻ってきた。困惑した表情を浮かべている。

「なんか宅急便みたいなんだけど」

「宅急便？」

「うん、それが、ちょっと変なの」

「何が」

「とりあえず、一緒に来て」

弥生に促され、伸也は玄関に向かった。

「なんだ、こりゃ」

伸也も困惑の表情を浮かべた。大きめのダンボール箱が、玄関のところ狭しと置かれている。数は、五つ。どうやら冷凍されているようで、離れていても、箱が発する冷気が感じられた。

「誰からの荷物だ……？」

差出人を確認する。全て、さかのうえのぶかつ坂之上信勝とあった。

「肉奉行からじゃないか」

「そうなの」

「どうしたどうした」

誠司もやって来た。

「肉奉行からの荷物だって？」

「そうらしいんだが……」

「いったい、こんな大量に何を送ってきたんだ？」

誠司が手近な箱の品名を確かめた。

「……足？」

怪訝そうに、誠司がつぶやく。たしかに、伝票の品名の欄には「足」と書かれている。

伸也は、別の箱も確かめてみた。「胸」とある。他の三つの箱には、それぞれ「腹」「腕」、そして「頭」と書かれていた。

静寂が辺りを支配する。

「お、おい」

誠司が震える声で、静寂を破る。

「まさか、これ、人間の、ってことはないよな」

何を馬鹿な。

伸也は、そう笑い飛ばそうとしたが、できなかった。静寂に戻る。

「そういえば」

弥生が口を開いた。

「信勝君、今日は『特別な肉』を持ってくるから期待してくれ、って」

三度、場に沈黙の緞帳じゅんちやうが下りた。

伸也は、もう一度、五つのダンボール箱を観察した。

いずれも、かなり大きい。バラバラにした人間の部位パーツも、楽に入りそうだ。

何を馬鹿なことを。

頭を振る。だが、疑念は去らない。

外気に触れたためか、箱はじつとりと湿り始めている。ふと、伸也は箱の表面に妙なシミが浮き出ていることに気付いた。赤黒い。まるで血のような――。

「開けてみよう」

沈黙に耐え切れず、伸也は言った。

「お、おい、待てよ」

及び腰で、誠司が制止してくる。

「も、もし本当に人間の、だったら」

「開けてみりゃ、分かる」

伸也は、「頭」の箱に手をかけた。封を開けた。

中には。

中には――髪が。

弥生が悲鳴を上げた。

その時、玄関のドアが開いて、誰かが入ってきた。

「やあやあ」

軽い調子で挨拶してきたのは、

「信勝」

坂之上信勝こと、肉奉行だった。

「まんまと、ひっかつたね」

愉快そうな表情で、開いたダンボール箱に近づくと、中から「頭」を無造作につかみ出した。

「マネキンだよ、マネキン」

よく見ると、「頭」の肌には人間らしからぬ光沢があった。髪もカツラらしい。ずり落ちそうになっている様子が、いかにも間抜けである。

「もう。いったい、なんなのよ、信勝君」

我に返った弥生が、肉奉行を咎める。

「冗談にしたって、悪質だわ」

「そ、そうだそうだ。趣味が悪いぞ」

と、誠司も同調する。腰を抜かしているので、さほど迫力はないが。

「いや、ごめんごめん」

肉奉行は、大げさに手を合わせてみせ、

「まさか、こんなに上手くいくとは思わなかったからさ」

「そういう問題じゃないだろう」

伸也も非難の輪に加わる。まだ、心臓が早鐘を打っていた。

困ったなあ、と肉奉行は頭をかき、

「ちよつとした余興のつもりだったんだよ。あ、そうだ」

と、手にした折り詰めを差し出してくる。

「約束どおり、特別な肉を持ってきたんだ。これで許してくれよ」

そう言つて、肉奉行は、にっこり笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060m/>

肉奉行

2010年10月8日14時40分発行